

島原原城攻めの覚書

— 諸藩の使者、佐賀藩など —

武田昌憲

はじめに

寛永十四年・十五年の天草・島原の乱（一揆）はその当初から佐賀藩はかかわっていた。

この佐賀鍋島藩は、地理的關係から一揆が立て籠った島原の原城とは同じ肥前国に位置し、「嶋原隣端」「地續」（『勝茂公御年譜』）の近さであった。そのため、早くから一揆鎮圧に参加した藩である。当然その出費や人的被害は膨大なものになる。

本稿では、佐賀本藩の記録から、諸藩の使者の動向も垣間見えたので指摘する。寛永十五年元旦の幕府軍の攻撃を中心に見ていく。

元旦の損害

そもそも一揆の発端は、松倉藩の苛政にあったことは鍋島藩でも把握していたようだ。松倉の重臣達

の苛政は徹底し、

「六万石の在家をいろり銭・火燵銭・窓銭・柵銭・戸口銭・死人に穴銭、生れ子に頭り銭を懸け、」（『勝茂公御年譜』）など種々の課税をして領民の反発が次第に増大していた。

佐賀藩は早くから幕府軍の一翼を担っていて、他藩の参加状況もつかみやすかったのかもしれない。当然他藩より功績をあげなければならないという自負もある。

諸藩の使者の討死

寛永十五年元旦の総攻撃では、幕府軍の大敗北に終わるわけであるが、鍋島藩の記録では「今日、当家の討死・手負都て二千五百余人、其内討死三百八十余人也。諸手の死創を算に五千余人に及べり、其外

国々よりの使者には、松平安芸守殿使者小山田新助、松平右衛門佑（佐）殿使者坪内右衛門、細川越中守殿使者伊東半之允（伊東十之允力）・横山助之進、此三（四力）人ハ板倉内膳殿手に在て戦死す。松平長門守殿使者国司下総守ハ殿を致し、其軍列正して名を現しけり。」

正規の軍勢以外に諸藩からの使者が戦闘に参加していることが分かる。しかも松平長門守殿（毛利家）使者国司下総守のように、しんがりが務まるくらいの兵力をつけてきていたことがわかる。^{注1}

その後の毛利藩の使者は二日以降も

「同一日、石谷重蔵殿、隣国に書を飛して軍勢を被招、依之、細川肥後守光利来陣あつて、日の江口に陣せらる、（中略）嶋津大隅守家久の使者嶋津下野守久光（久元力）、三千人を以日の江山の麓に在陣す、毛利家の使者等日々に来り重、日の江・黨（堂）崎の山野に充滿する」（注、「毛利家の使者」については（明和本）には「此外薩州之使者三原左衛門・山田民部・池田家之使者、毛利家の使者」とある（『佐賀県近世史料』第一編第二卷『勝茂公御年譜』六、

127P）

とあり、毛利家も嶋津家や池田家の使者とともに毎日のように兵を送っているようである。

苦楽を共にした存在として毛利藩の使者、国司氏の活躍には佐賀藩として同情している。

上使討死の意味

寛永十五年元旦の総攻撃での幕府の最高指揮官である板倉重昌の討死は、幕府の敗北を象徴する衝動的なできごとであった。当然諸藩の損害が無傷というわけにはいかない。生き残った者にもそれ相応の犠牲が必要と考えられた。

各藩にもそれ相応の犠牲者がいる。

細川藩では「川尻へ細川勢の渡海見送りのためきていた家老監物は二日、横山助之進、伊藤十之允の討死を知り、茶屋の玄関を上がりながらいった。

さてもさても、目出度き事かな、上使の討死に御家来が死なでよきものか、助之進、十之允でかした、と高声に申して通られ候に、諸人氣を通し、いかにもそのはずじゃと色を直し候（『忠利公御年譜之内、

有馬記」

以上、戸田敏夫『天草・島原の乱―細川藩史料による―』（昭和六十三年、新人物往來社）

一方、佐賀藩の記事でも、苦戦して死傷者続出の中、「旗本の侍大将鍋嶋帯刀茂里、先手の軍の急成るを見て、其各（兵）一千の（を）ひきひ、（中略）城中に攻入んと土手にのりあかるるとき、眼を鉄炮にて打貫れ忽死す、」そして、多久美作守茂辰が戦っているところに上使板倉内膳重昌の討死の知らせが入ると、「茂辰是を聞、上使戦死の上ハ当家よりも歴々の者討死の場也、我等戦死すべしと無二無三二押出時に、鍋嶋帯刀戦死のよし相知しかハ、於然は我等戦死二不及とて、軍を静めて猶相戦ふ、」

鍋嶋帯刀の戦死により、藩の対面が保てた。名のある武士がこれ以上死ぬ必要がないので、慌てて死なないように伝令するのである。細川藩でも横山助之進、伊藤十之允の討死のおかげで面子が保てたと言わんばかりの記述であったことが知られる。総大将を失うことは大将一人の問題ではなく、参戦した諸藩のやる気があったかの評価が問われる。その評

価基準が討死や負傷者の数になる。

佐賀藩の莫大な犠牲

この日の佐賀藩の損害は前代未聞であった。再起不能になる寸前でなかったかと思われる。

結局、幕府軍の人的損害は、佐賀藩も加えて以下のように記録されている。『勝茂公御年譜 七』

今度於嶋原城寄手討死之覚

鍋島信濃守家中 討死六百式拾人

内 大物頭三人 侍八十人

手負 三千三十四人

細川越中守家中 討死式百七十四人

手負千八百廿六人

松平右衛門佐家中 討死式百十三人

手負千六百五十八人

黒田甲斐守家中 討死三十二人

手負三百四十五人

黒田市正家中 討死十六人

手負百五十六人

有馬玄番頭家中

討死七十八人

松平伊豆守家中

討死六人
手負百余人

立花肥田守家中

討死百二十七人

佐賀藩の被害状況は

松倉長門守家中

討死二十七人

「討死六百貳拾人 内 大物頭三人 侍八十人手負 三千三十四人」とあり、諸藩の中では最も損害

小笠原右近太夫家中

討死二十五人

が大きい、実際にはもっと人的損害は大きい。

小笠原信濃守家中

手負い貳百三人
討死十九人

また、当然ここには諸藩の使者の人的損害は記されていない。

松平丹後守家中

手負い百四十鉢人
討死三十一人

原城包圍戦で最終的に揃った諸勢は、細川藩の

水野日向守家中

手負百二十七人
討死百六人

記録（「忠利公御年譜之内、有馬記」）では、細川藩は二万八千六百人であるのに対し、鍋島藩は

寺沢兵庫頭家中

手負三百八十二人
討死二十三人

一万四千三百人と記されている。数回の戦闘による莫大な死傷者は換算されていないのである。鍋島藩に

有馬左衛門佐家中

手負三百十五人
討死三十九人

とっては屈辱的な数字といえる。なお、この記録による寄せ手の人数は合わせて十一万七千六百七十五人と記し、其れとは別に続けて

戸田左門家中

手負三百八人
討死四人

「他に一万五千人 方々使者上下
総合十三万二千六百七十五人」

手負い三十四人

となっている。毛利藩を含めた、一万五千という

多くの諸藩からの使者(という名目の戦闘部隊)が参加していることは興味が尽きない。

しかも佐賀藩はこの時の先走りの軍令違反が問われ、戦後、閉門蟄居を命じられる。名誉の戦いどころか、藩の存続にかかわる重大時にかかわっていく。踏んだり蹴つたりの藩であった。

佐賀藩は最初から最後まで活躍したにもかかわらず、幕府からはおとがめを受け、出費も多く、人的損害も随一であった。この点、本丸一番乗りや天草四郎を討ち取ったりした細川藩の活躍は幸運としか見えない。

また、藩同志、不仲の藩もある。結局一揆鎮圧で最も恐るべきは一揆方ではなく、ある面諸藩の動向はゆる味方同士がもつとも強敵であったともいえる。

佐賀鍋島家の戦死者は幕府軍の実に三分の一に及ぶ。特に元旦の総攻撃では鍋島藩だけの攻撃描写で「被官八十五人一所に討れ手を負たり」「七十

余人討死し、三百余人手を負たり」「此手の死創都合八百六十七人」「雑兵四十九人討死し、手負は五百二十二人也」「足軽四十余人討死し、…手負百五十余人也」「雑兵百九十余人討死し、…雑兵百九十七人疵を蒙る」「侍十七人疵を蒙り、雑兵討死数を不知」原城下は鍋島藩勢の屍で埋まったような悲惨さであった。

おわりに動員兵力の問題を考えたい。寛永十五年の正月十五日には鍋島藩では

「此とき当家の人数都合三万式百九十三人、馬七百四十一疋也、然とも其数自余に過たる故に被滅之、御書出の趣

鍋島信濃守人数覚

都合夫兵二萬五千三百三人

内

兵 式萬千三人

夫 四千三百人(『勝茂公御年譜』)

これまでの幕府の公式動員人数とは別に、各藩の実際の動員人数は改めて確認する必要があるかもしれない。公式記録だけで歴史を見ていないか気になる。

るところである。 (続く)

注

- (1) 毛利家(藩)の使者の活躍については、拙論「島原の乱の使者の戦い(その1)―毛利藩の場合―」(『茨城女子短期大学紀要』三十六号、平成二十一年三月)に述べた。